

2023年5月28日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「わたしを見てくださる神」

聖書：創世記19：15～26

サライは、子どもが出来ずに年を重ねていた。女性は子を産まなければ軽んじられると言う社会の中で苦しみ悶えていた。そこで取った行動はこの社会構図に合わせた生き方だった。自分の女奴隷であるハガルを、夫アブラムに与え、そのことによって自分の子を得ようとする。ハガルは、サライの思い通りに子を宿すが、サライの思いは満たされず、自分が与えたはずのハガルに嫌がらせをし、この場に居られない状況をつくった。ハガルは身重でありながらも、荒野へ飛び出してしまふ。行く当てもなく荒野をさまようハガルの思いは、居場所のない辛さ、悲しみでいっぱいであったことであろう。人間の社会は、過った構図の中で身を任す時、そこには人間の弱さと醜さがあらわにされて行くものである。この女性たちの争いのきっかけは、結局は男性社会が生んだ結果である。

ハガルは、女主人サライの冷酷な扱いと荒野の孤独の中で、自分を見てくださる神に出会う。時に苦難は、神に出会うきっかけにもなれば、神を失う事もあるが、しかし神は、「エル・ロイ、わたしを顧みられる神、私を見てくださる神」であることを、私たちは忘れてはならない。

神は、「わたし」という一人の人間に出会ってくださった。神は、荒野をさまようハガルに対して「あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」と問う。ハガルに「自分は何者か」と問う。苦しみから逃げてきて荒野に一人ぼっちの私を見ておられる神。神は「あなたの子孫を数えきれないほど多く増やす」という祝福の約束をするが、それは決してアブラハムのそばにいて、アブラハムに結びついたがゆえのものではなく、ハガル自身への祝福であった。ハガルは、族長以外にこの約束を受ける唯一の女性である。誰かの付属品や道具ではなく「わたし」を見てくださる神、その神を見出した喜びが表れている。

ハガルは荒野をさまよう時、実は故郷のエジプトに帰ろうとしていたとも言われる。しかし彼女は、もう一度、抑圧の中へ、社会の構図の中へという選び取りをした。逃げるのではなく向き合う力が与えられていくということ。彼女は「追いやられたかわいそうな人」ではなく、神からの語りかけを聞き、その声に立ち上がって行った預言者として見ることも出来る。

神は、「わたしを見てくださる神」であり、私たちとも出会ってくださるのであり、「わたし」という一人の人間に出会ってくださるということ、このところから改めて教えられて行きたい。(神谷)